第５学年３組　道徳学習指導案

指導者　教諭　出　頭　秀　彦

１　主題名　感謝　２－（５）

２　資料名　あたりまえのこと（自作資料）

３　主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

内容項目２－（５）は「日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し，それにこたえる。」である。「小学校学習指導要領解説　道徳編　平成20年８月　文部科学省」では，小学校高学年の段階においては，感謝の対象を人のみならず日々の生活そのものにまで広げることの大切さを強調している。そうした中で，あらゆるものへの感謝の気持ちをもち，その気持ちを表すことで，潤いのある人間関係が築かれることを自覚することが大切である。人は誰しも，目の前の問題や欲求にとらわれ，自分を支えてくれるものに感謝の気持ちを感じ，それを表すことを忘れがちである。したがって，時にはふと周りを見渡し，自分の日常があらゆる人やものに支えられていることを感じ取り，それらに感謝の気持ちを表すことが大切である。

この内容項目は，人々が，日々の暮らしの中で自分を支えてくれるもの全てに思いをはせ，それらに感謝の気持ちをもち，それにこたえようとする心をはぐくむものである。

(2) 児童の実態について

実態調査から，学級の大半の児童については，感謝の気持ちに関する心情・判断力・実践意欲がはぐくまれていると判断できる。ただし，行為についての質問『いつも「ありがとう」の言葉が素直に言える。』に対しては，「だいたいは言える」という回答がほとんどである。その理由は「知らない人には，ちょっと言えないかもしれない。」「たまに素直になれない時がある。」「忘れてしまうことがある。」などであり，心ははぐくまれているが，行為として表出するには課題があり，いつ，誰に対しても感謝の気持ちを表せるわけではないという実態が見て取れる。特に「言えないことの方が多い。」と回答した児童への指導が必要である。

☆感謝の気持ちに関する実態調査〈平成23年10月14日実施；第５学年３組31人〉

質問	回答		
「ありがとう」という言葉って，いいなと思う。	とてもそう思う。	25人	言われたらうれしいから，等。
	どちらかといえばそう思う。	５人	ありがとうは素敵だから，等。
	あまりそう思わない。	１人	気持ちよくならないから，等。
	全くそう思わない。	０人	
「ありがとう」の言葉を，口に出して言うことは大切だ。	とてもそう思う。	21人	相手もうれしくなるから，等。
	どちらかといえばそう思う。	10人	もっと仲よくなれるから，等。
	あまりそう思わない。	０人	
	全くそう思わない。	０人	
「ありがとう」とできるだけ言うように心がけている。	いつも心がけている。	11人	大事な言葉だから，等。
	なるべく心がけている。	19人	たまにわすれてしまう，等。
	あまり心がけていない。	１人	そればかり心がけるから。
	全く心がけていない。	０人	
いつも「ありがとう」の言葉が素直に言える。	いつも言える。	９人	言わなきゃ伝わらないから，等。
	だいたいは言える。	20人	知らない人にはちょっと言えないかもしれないから，等。
	言えないことの方が多い。	２人	言おうとしているんだけど言えない，等。
	ほとんど言えない。	０人	

(3) 資料について

本資料は，授業者の自作資料である。市のフットサル大会を舞台に，自己中心的なものの考え方しかできなかった中心選手の健二が，給食センターへの取材をきっかけに，自分の生活は周りの友達や保護者などに支えられていることに気付く。その過程を通じて，自分の生活を支えてくれる人々に対して感謝の気持ちをもつことの大切さを自覚する姿を描いている。

授業では，周りの友達や保護者の支えを実感できず，ふてくされてしまう主人公の気持ちを考えることを通して，誰もがおちいりがちな，自己中心的な考え方や人間の弱さに共感させたい。次に，給食センターの方の話を聞き，恥ずかしく思う健二の気持ちを考えることで，知らないところで自分たちのために努力している人たちがおり，その支えが大切であることに気付かせたい。さらに，フットサル大会で，主人公の健二が友達にはいてしまった暴言「あたりまえのことがわからない。」を振り返り，それは本当は誰のことを指すのかを考える活動を通して，ねらいとする価値に迫りたい。

4　本時の指導

(1) ねらい

主人公の心情に共感することを通して，日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに気付き，それにこたえようとする心情を育てる。

(2) 準備

読み物資料，ワークシート，挿絵，発問カード（掲示用）

(3) 展開

流れ	学習活動と発問	予想される児童の反応	教　師　の　支　援
関心をもつ	1　自分たちの感謝に関する心情について考える。 ○ありがとうという言葉を言った時，言われたときの気持ちを話し合いましょう。	・言われるとよい気持ち。 ・言うのは恥ずかしいけど，言うと気持ちがよい。	・ねらいとする価値にふれ意識付けを図る。
深める	2　読み物資料「あたりまえのこと」を読み話し合う。 ○フェンスによりかかってむこうを向いていた時の健二の気持ちを考えましょう。 ○なんだか，恥ずかしいような気がしたのはどうしてでしょう。 ◎『あたりまえのことがわからない』のは自分かもしれないと思ったのはどうしてでしょう。	・負けて悔しい。 ・パスをくれないからだ。 ・お母さんもうるさい。 ・作る側の気持ちを考えていなかったから。 ・今まで平気で残して来たから。 ・チームメートの事を考えないで暴言をはいてしまったから。 ・お母さんたちの気持ちを考えなかったから。 ・自分のことばかり考えていた。	・主人公が狭い視野でしか物事を考えていないことを押さえさせる。 ・知らないところで自分たちのために努力している人たちがおり，その支えが大切であることに気付かせる。 ・自分の生活を支えてくれる人々に対して，感謝の気持ちをもつことの大切さを自覚させるようにする。 ☆期待する姿が見られなかった場合の指導 健二の「恥ずかしい」という感情を手がかりに，価値に迫れるようにする。
見つめる	3　授業を振り返り，感じたことを話し合う。 ○「心のノート」P58を参考に，私たちがお世話になっている人々を思いうかべ，感謝の気持ちをメッセージに表しましょう。 ○メッセージに表した思いをみんなの前で発表しましょう。	・今の自分は，皆に支えられているから感謝したい。これからは自分も，言葉や態度で表したい。 ・今の自分は，皆に支えられているから感謝したい。 ・感謝の気持ちを表すことは素晴らしい。 ・感謝の気持ちを，別に素晴らしいと思わない。	・個人で，短冊形のワークシートに，誰にどんな感謝の気持ちをもっているかをメッセージとして記入する。 ・全員が各自の感謝のメッセージを黒板に貼り，その人への感謝の気持ちや書いた理由などを発表し合う。 ・黒板に感謝のメッセージを掲示する欄を設け，その中ならば何枚でも，掲示させる。 ㊟日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに気付き，それにこたえようとする心情が育ったか。（短冊形ワークシート，発表，観察）
つなぐ	4　教師の説話と，「心のノート」P58の詩の朗読を聞く。	・全員静かに，教師の説話と詩の朗読を聞く。	・机を一斉形態にもどし，落ち着いた雰囲気で教師の説話と朗読を聞けるようにする。

あたりまえのこと

グランドに響く歓声、味方への指示の声、審判のホイッスル。今日は、市内の小学校対抗フットサル大会の日だ。スポーツ少年団でサッカーを習っている健二は、C組のエースだ。健二たちのC組は、五年生の部で優勝しようと張り切っていた。順調に勝ち進んだ健二たちの五年C組は、決勝戦で、東小学校の五年一組と対戦することになった。

「さっきの試合、健二君のシュートはすごかったね。」

「そうそう、大事なところで二点も決めてくれて、たすかったわ。」

差し入れのジュースや果物を差し出しながら、お母さんたちも笑顔だった。今日は休日だが、健二の母をはじめ、C組の保護者たちは、朝早くから健二たちのためにいろいろと準備してくれていた。

健二は得意気だった。自分のプレーには自信があったし、当然、この大会でも優勝して自分がヒーローになるつもりだった。

しかし、決勝戦では東小学校相手に一点リードを許したまま、試合が進んだ。残り一分になった時、右から康夫がドリブルで攻め込んだ。これがラストチャンスかもしれない。その動きに東小学校の選手が引きつけられ、ゴール前の健二がフリーになる。

「康夫！真ん中にパスを出せ。」
健二は手をあげて叫んだ。
しかし、康夫はさらにドリブルで切れ込みシュートした。しかし、二人の相手にかこまれたままのシュートは、大きくゴールをはずれていった。その瞬間、試合終了のホイッスルが鳴った。残念ながら、健二たちC組は準優勝である。
健二は、康夫を問いつめた。
「康夫、何でおれにパスしなかったんだよ！」
「うん、あそこで相手が、健二を守りに行くだろうと思って、裏をかいたんだけど・・・。」
「何言ってるんだよ。おれにパスをくれれば確実に決めたよ。延長戦になれば、体力のあるおれたちのチームの方が、有利なのはわかっているじゃないか！なんであたりまえのことがわからないんだよ。」
「やめろよ。前の試合までは、康夫が体をはって守ってくれたから勝てたんじゃないか。」
他の友達が、健二をなだめに入った。
それでも納得がいかない健二は、
「健二、朝から応援してくれた他のお母さんたちにあいさつしなくちゃ。」
という母の言葉にも応えず、フェンスによりかかってむこうを向いていた。

二日後、健二たちC組は総合の時間の調べ学習で、市の給食センターへ取材に出かけた。給食センターの仕事について取材させていただくことになっていたのだ。健二たちに説明してくれるのは担当の山田さんだ。山田さんは、写真と実物をもとにていねいにお話してくれた。まず、驚いたのは調理前の準備だ。

「みなさんも、食事をする時は手を洗いますよね。私たち、給食センターの職員も、衛生状態にはとても気をつかっています。」

と言うと、二枚の写真を見せてくれた。

「これが、何をしているところかわかりますか？」

「手を洗っているところ？」

「そう、確かに手を洗っているところだけど、私たちは石けんと爪ブラシで、隅々まで洗います。それから、この写真は『エアシャワー』に入っているところです。」

「エアシャワー？」

「体や白衣についた髪の毛やほこりなどの細かいゴミを、空気でとばしてきれいにするんです。」

「へー、そんなことまでするんだ。」

健二はおどろいた。そのほかにも、給食センターでは、安全な食材の手配、温かいものを温かく、冷たいものを冷たく食べられるための温度管理、フライなどは何百個という数を手作業であげていることなどを聞いた。

「給食作りはチームワークが大切。給食センターの職員はもちろん、新鮮でおいしい食材を届けてくれる生産者の方も含めて、全員が力を合わせないとおいしい給食は作れません。大変ですが、皆さんのためだからあたりまえのことです。」

健二は、給食つくりにそんな苦労があるとは考えてもみなかった。今まで、自分の好きなものは食べるが、嫌いなものが出たら『おいしくない。』といって、箸も付けずに残すのはあたまえのことだった。なんだか、恥ずかしいような気がした。

その日の夕方、健二は自分の部屋でベッドに横になり、今日の給食センターの山田さんのお話を思い出していた。

（給食が、あんなにおれたちのことを思ってつくられていたなんて・・・・。それに、『給食作りは、みんなのチームワークが大切。』なんて、サッカーやフットサルといっしょだなあ。それに『あたりまえのこと』って言ってたなあ・・・。）ふと、この前のフットサル大会での、康夫やチームメイト、保護者たちの姿が頭に浮かんだ――――――健二は立ち上がった。

（『あたりまえのことがわからない』って、もしかしたら自分かもしれない。）

健二は、沈む夕日を見ながら、あることに気付いた新しい自分を感じていた。